少年少女ドキュメンタリー 7

■イタイイタイ病を追って

死の川とたたかう

八田清信／著

解説／病体生理研究所長 秋元寿恵夫

POCU MENTARY SERIES

少年少女ドキュメンタリー／7

死の川とたたかう

偕成社　1979年　216 p. 23 cm
N. D. C. 916

1973年9月　1刷
1979年8月　11刷

著　者　八田清信

発行者　今村　広

本文組版印刷　新興印刷製本株式会社
写真版製版　株式会社興陽社
多色刷印刷　小宮山印刷株式会社
製本　文勇堂製本工業株式会社

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3—5
振替　東京5-1352
電話　03 (260) 3221

©八田清信 1973　8395—712070—0904　Printed in Japan

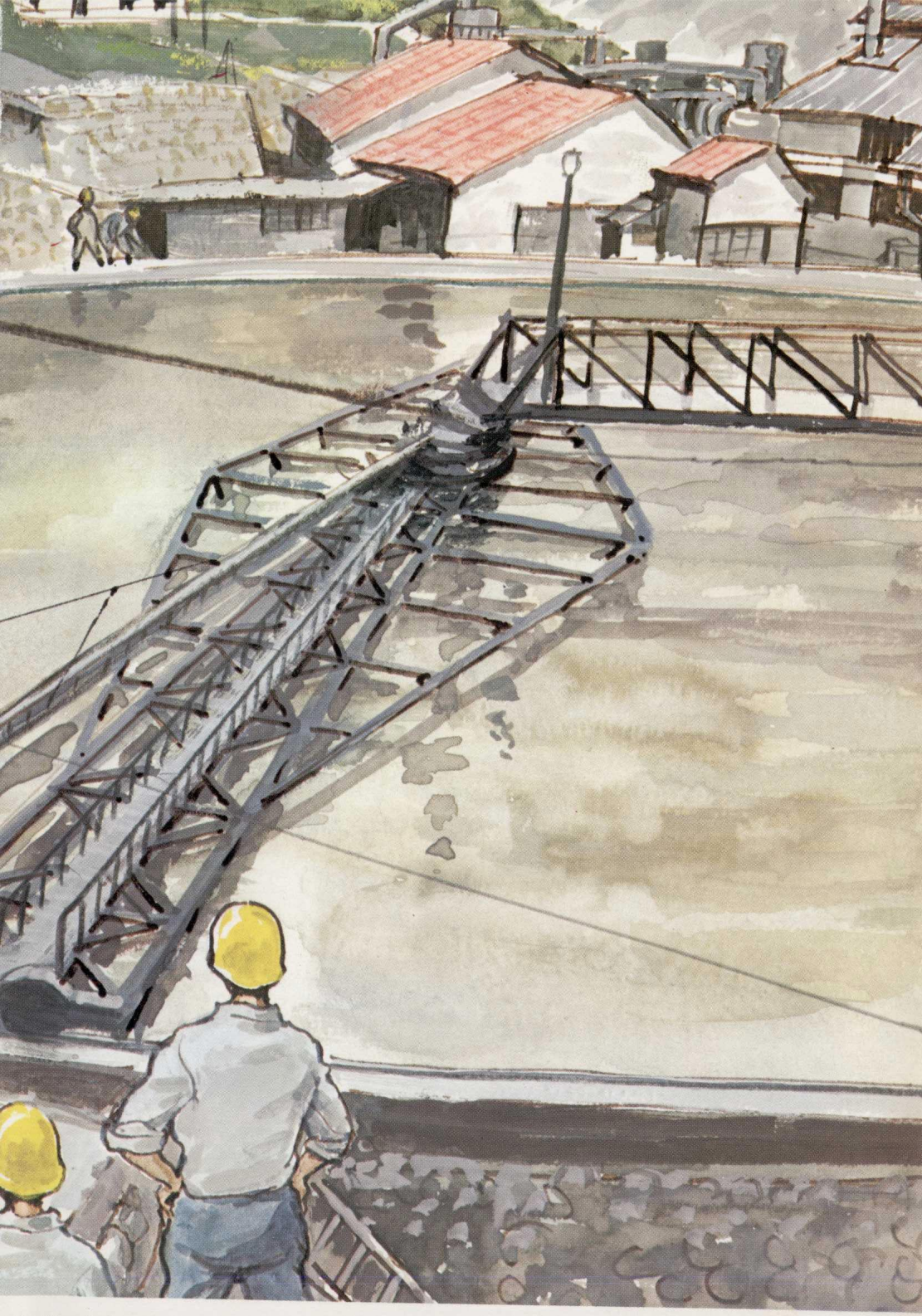
日文 701566745

を追って

死の川とたたかう

八田清信／著

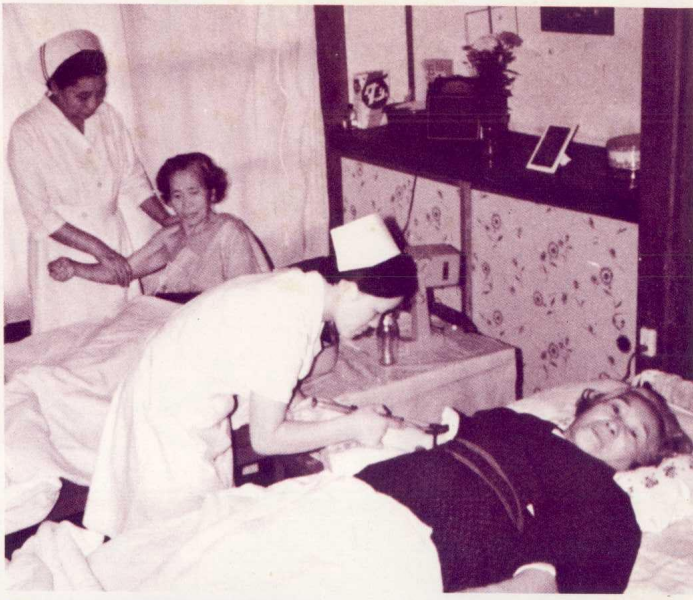
少年少女ドキュメンタリー　7



上流の神岡鉱山をおとずれ，鉱滓の処理の仕方を係員にくわしくたずねた。

「イタイイタイ病の原因は神通川の水だ。」 そう考えた萩野博士と小林教授は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



右上＝入院中のイタイイタイ病患者を献身的に世話する萩野病院の看護婦さんたち。左が婦長の堀つやさん。**右下**＝神通川からひきいれた患者の家の用水。この水が飲料水や炊事につかわれていた。**上**＝イタイイタイ病患者の大たい部のレントゲン写真。骨が複雑に骨折しているのが見える。

読者のみなさんへ

この本は、日本の代表的な公害病のひとつである、イタイイタイ病の物語です。

わたしが、はじめてイタイイタイ病のことを知ったのは、一九五五年の夏でした。イタイイタイ病の発見者である萩野昇博士が、わたしにおしえてくれたのです。萩野博士は、わたしに話をする十年もまえから、イタイイタイ病ととりくみ、ひとりでこつこつと研究をつづけていたのでした。

そのころ、富山新聞の記者をしていたわたしは、さっそく患者の家へ案内してもらいました。そして、目をおおいたくなるような患者の症状を見ているうちに、できるだけの力をかたむけて博士に協力しようと心にきめました。

しかし、患者をすくうための道は、けっしてたんたんとしたものではありませんでした。とくに、イタイイタイ病の原因が神岡鉱山の鉱毒である、と発表してからの博士は、はげしい嵐のまっただなかに立たなければなりませんでした。

わたしは、この物語で、まず、イタイイタイ病の研究と患者の救済に生涯をかけた萩野博士のたたかいの記録を、ありのままに紹介しました。それか

■著者の略歴　1909年富山市に生まれる。富山商業学校卒業。富山新聞社会部長，編集局次長などを歴任。15年間にわたってイタイイタイ病の取材にとりくむ。1969年停年退社。この本をライフワークとして1978年永眠。

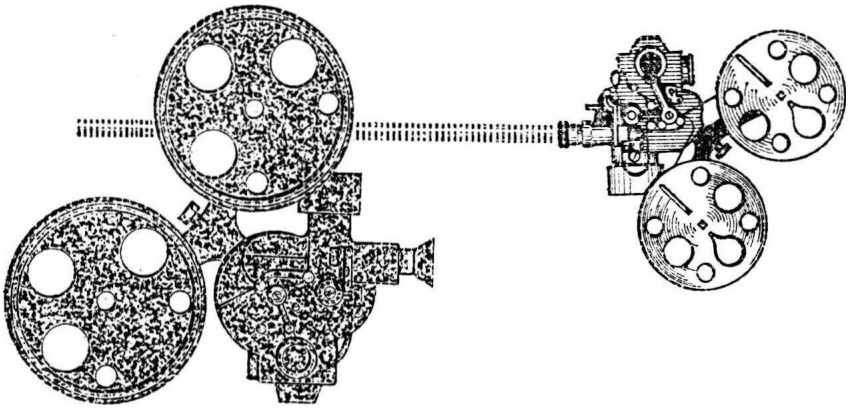
ら、萩野博士の研究がもとになって、イタイイタイ病が日本の公害病第一号としてみとめられ、やがて、多くの人びとが公害裁判へ立ちあがるいきさつをのべました。そして、さいごに、日本ではじめての公害裁判が、いろいろな障害をのりこえて、勝利へこぎつけるまでのドラマをえがきました。

この本が、人間の生命をむしばむ公害のおそろしさを知り、公害をふせぐうえに、いくらかでも役だてばさいわいです。

なお、この本をまとめるについては、萩野博士のご指導と、富山新聞社長、宮下与吉氏のはげましのことば、それから、富山新聞報道局長、温井申六氏、同次長、加藤夏樹氏らのご協力によって、多くの資料や記録写真を提供していただいたことを厚くお礼申しあげます。

また、原稿の整理と編集にあたっては、加藤秀氏の大きな助力があったことを申しそえます。

元富山新聞社　八田清信



もくじ

1 イタイイタイ病との出会い

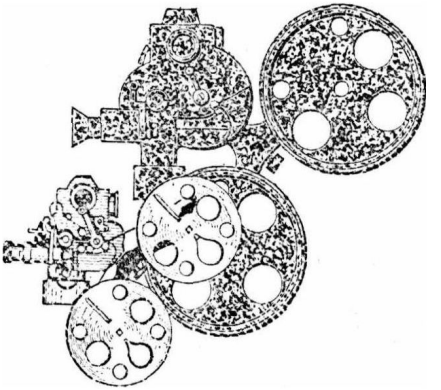
悲しみの歌……12
萩野博士の報告……14
病気の名づけ親……18
奇病ととりくむ……21

2 悲惨な病状

患者は訴える……27
破壊される家庭生活……31
病気の特徴……34
手さぐりの十年間……38
河野博士との共同研究……41
水があやしい……45

3 犯人をもとめて

神岡鉱山の歴史と鉱害……49
白い水のなぞ……54
鉱毒説を発表する……58
攻撃の嵐……60



4 ふしぎなめぐりあい

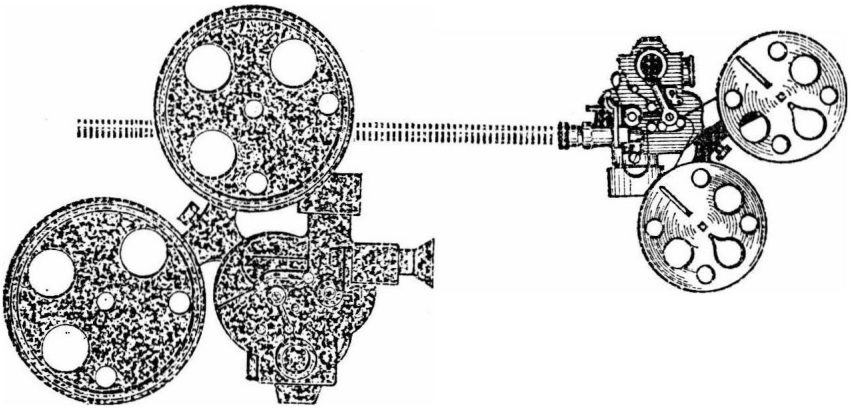
小林教授の分析……66
目に見えない糸……70
骨からカドミウムが……75
カドミウムとは？……80
犯人を追いつめていく……84
ふたたび神岡鉱山へ……87

5 吹きすさぶ嵐の中で

吉田県知事と会う……92
原因と責任のありか……95
しのびよる黒い手……100
身も心もつかれて……106
動物実験に成功……108
故国をのがれる……110

6 立ちあがる人びと

小松義久の怒り……115
社会の光をあびて……119
訴訟にふみきる……123
公害病第一号……130
決意の涙……137



7 生命をかけた証言

イタイイタイ病の詩……144
二人の天使……148
追いつめられる被告……151
企業がわの証人たち……155
公害の恐ろしさ……159
日本の四大公害裁判……163
被告がわのあがき……168

8 世紀の裁判

判決くだる……175
長かった勝利への道……181
判決の受けとめられ方……183
第一回国連人間環境会議……188
公害問題の夜明け……195

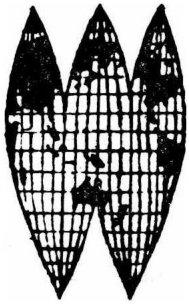
《資料》
公害豆辞典……200

《解説》
イタイイタイ病と日本の公害……206
病体生理研究所所長　秋元寿恵夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

■表紙写真説明

イタイイタイ病の発生源となった死の川・神通川と，イ病の究明にその半生をささげた地元の萩野医師。右下すみは著者がはじめてイ病を報じた富山新聞。



■さしえ　市川禎男

■図版　進英社

■表紙レイアウト　市川寛志

■写真資料提供　富山新聞社
共同通信社
小林純
萩野昇
その他

●イタイイタイ病を追って

死の川とたたかう

八田清信・著

解説・秋元寿恵夫

少年少女ドキュメンタリー 7

〈1〉イタイイタイ病との出会い

悲しみの歌

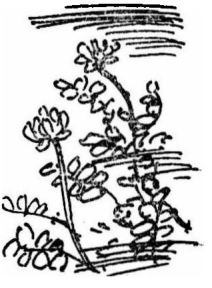
母は死んだ、雪の降りしきる二月の夕べ。リンゲルとぶどう糖注射、酸素吸入など、ありとあらゆる手段をつくした。

あらくはげしい呼吸が急にとだえて、六十七才の悲しみと怒りの命を　白い病室でとじた。江添チョさん、私はあなたの息子ではない、だけど私はあなたを母とよびたい。

日本がうそっぱちの戦いに敗れ、すこしは人間らしくなりだしたころ、私はやっと、この世に生をうけた。ちょうどそのころ、あなたはすでにいまわしい病床にいた。

あれから二十余年、私はなにも知らずに、婦中町に育ってきた。水をうたがわず　春は大地を信じて、野草をつみ歩いた。が、やがてイタイイタイ病の名が若い胸につきささった。

そしていま　私はあなたのことを思って　こんなにもすなおに泣ける　まるで自分のもののように。あなたの　くやしいうらみと怒りが私を燃やし、私の命があなたの生きようとした道につらぬかれるのを感じる。あなたの苦しみのひとかけらでさえ　知るものな



ら　ふきあげる怒りを　どこでおさえつけたらいいのだ。

神仏にすがり　うらないもし、雪がとけると　たんぼのすみずみに祈りながら　塩をまきつくして清らかにした。各地の鉱泉へ湯治にゆかせた。入院してからは　いくどもの正月を待ち　むかえて　別れた。長い生活の中から　三井が犯人だと信じはじめ　科学が確信をあたえ　それをつかんだ息子たちは　「むしろ旗だ」と　口ぐちに怒りをつきあげた。お母さん。

だけど私は　涙にくずれた顔を　やつらに見せない。やつらを追いつめ　真実のまえにひざまずかせるまで、吹雪だろうと　雨だろうと、凍りつくような夜だってかまわない。かけまわり走りまわり、あなたの悲しみと怒りの命をうけついで、春を、ほんとうの春をむかえるために、息子たちと戦っていくだろう。

これは、一九七一年（昭和四十六年）二月六日、イタイイタイ病で死んだ江添チョさんの霊前にそなえられた詩である。そなえた人は、江添チョさんとおなじ富山県婦負郡婦中町にすむ藤田充さんという二十五才の青年であった。

藤田さんは、この詩でイタイイタイ病という悲惨な病気の犠牲者にたいする悲しみをうたい、病気をはこんできた犯人への怒りをぶちまけたのであった。

この物語は、日本の公害病第一号となった、イタイイタイ病の記録である。

萩野博士の報告

一九五五年（昭和三十年）八月二日の午後三時ごろ、富山市岩瀬浜にある八田清信（この本の著者）の家をたずねた人があった。訪問客は富山県婦負郡婦中町の医師、萩野昇博士で、日曜の午後、家族づれで岩瀬浜海水浴場にきたついでに立ちよったのだった。

萩野博士は婦中町に古くからつたわる萩野病院の病院長で、とうじ、富山県医師会の広報部長をつとめていた。

いっぽう八田清信は、そのころ四十六才の働きざかりで、富山新聞の社会部長をしていた。そして、県内の教育、文化、厚生方面の記事を積極的にとりあげ、とくに、病気や衛生の知識を一般の人びとにひろめるために、医学関係の取材と報道に力をそそいでいた。

八田記者は、ひまをみては県下の病院や医師を訪問したが、中でも足しげく通ったのは、新聞社の近くにあった富山県医師会であった。そこでは毎月二回、各地区代表の医師の会合があり、もっとも新しい医療関係のニュースを、まとめて取材することができたからである。

そういう関係から二人は、自然に親しくなり、その

後も長く友情をとりかわすことになるのである。

ところで八田記者の家をたずねた博士は、海岸近くの浜茶屋へ八田記者をさそった。二人は風通しのよい浜茶屋の一隅で、休日のひとときを雑談にふけった。話がひとくぎりしたあと、博士がポツリポツリと語りだした。

「八田さん、いままでだまっていましたけど、わたしの住んでいる婦中町に、ふしぎな病気があって、てきとうな治療法が見つからず、こまっているんですよ。」

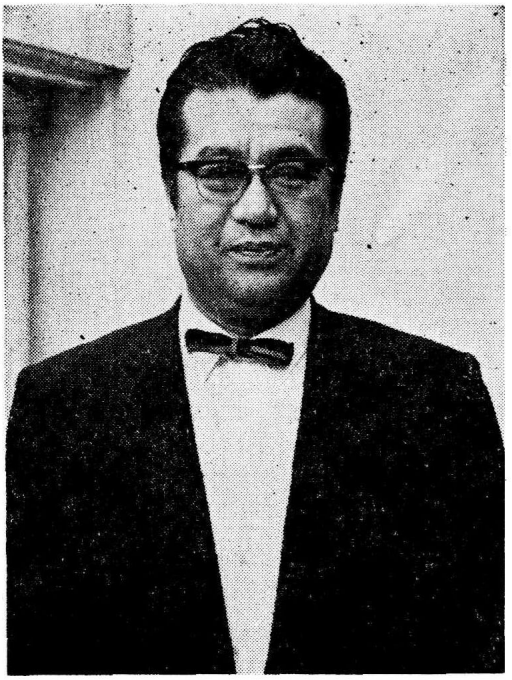
「ふしぎな病気って、どんな病気ですか。」

八田記者は、とたんに新聞記者のするどい目つきになって聞きかえした。

「それが、話をするだけでも胸がふさがれるような悲惨な病気なんです。患者は、ほとんど中年をすぎた女性ですが、全身何十か所となく骨折し、いたいいたいと泣きさけびながら死んでいくのです。」

「それは、まったく初耳です。先生、もう少しくわしく話をしてくださいませんか。病気の原因はなんですか。患者は何人ぐらいいるんですか。できたら患者さんのところへ案内してください。」

八田記者は、じっとしていられなかった。すばらしい特ダネである。ほかの新聞にかぎつけられたりするまえに、記事にまとめなければならない。萩野博士も、



イタイイタイ病の発見者，萩野博士

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com